

「生きる」思想について

2022.10.26

大阪労働学校

田畑 稔

田畑稔(1942～)自己紹介

季報『唯物論研究』編集長
(創刊1981年～現在155号)
大阪哲学学校世話人
(創立1986年～)
21世紀研究会(2001年～18年)

『マルクスとアソシエーション』1994
『マルクスと哲学』2004
増補版『マルクスとアソシエーション』2015
共編著『21世紀のマルクス』2019
大阪哲学学校編『生きる場からの哲学入門』2019

思想家
哲学者
編集者

大阪大学・大学院哲学科(1962-72)
富山大学教養部(1974-79、哲学)
広島経済大学(1998-2002、倫理学)
大阪経済大学人間科学部
(2002-2012、人間論、哲学)

ドイツ哲学研究(主にヘーゲル)
マルクス再読(1981～)
「生活の吟味」としての哲学
思想の現状分析
生活過程論

田畑稔2022年後期講義

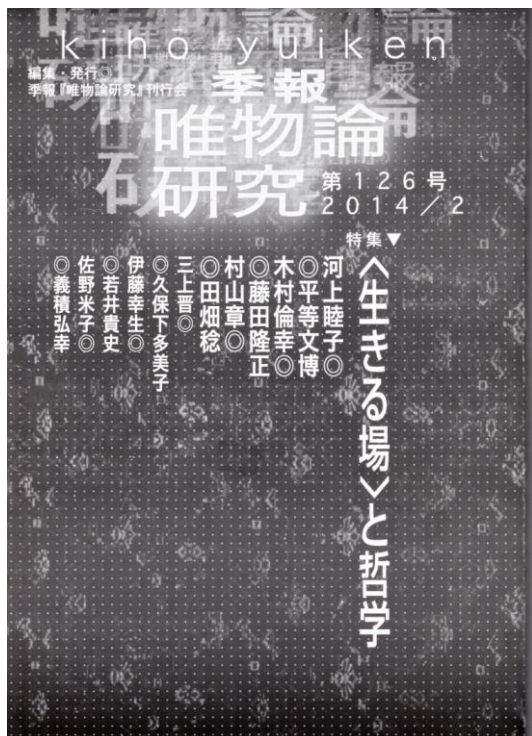
「生活過程論」で読むマルクス ——「21世紀のマルクス」へ

- 10/26 第1講 (個人的生活過程・関連)
「生きる」思想について
- 11/30 第2講 (物質的生活過程・関連)
マルクスにおいて唯物論は何を意味したのか
- 12/21 第3講 (現実的生活過程・関連)
現実性、意識、イメージ、そして幻想
——現実性と実在性の差異
- 01/25 第4講 (歴史的生活過程・関連)
晩期マルクスが直面した諸問題

マルクス「生活過程」全体図(暫定)

- I. 「総過程」としての「生活過程」(「人間たちは生活する」)
 - 「現実的生活過程」 現に作動しつつある存在様相下に見られた「総過程」
 - 「社会的(gesellschaftlich)生活過程」 単位社会における「総過程」
 - 「歴史的生活過程」 マクロな変容過程として見られた「総過程」
- II. 「生命過程」 人間たちの「生活過程」の地盤(element)をなす過程
 - 地球環境下の生命史的生態学的過程
 - ヒトおよび「身体的生活過程」(生理学的身体過程)
- III. 「部分諸過程」(近代社会における)としての「生活過程」とその端初規定
 - 「物質的生活過程」「生活諸手段の生産、分配、交換、消費」の諸行為、諸構造、諸過程
 - 「社会的(sozial)生活過程」「人間たちの相互諸行為」、その諸構造、諸過程
 - 「政治的生活過程」「社会の公的総括」の諸行為、諸構造、諸過程
 - 「精神的生活過程」 認識、価値判定、意志、学習などの諸行為、諸構造、諸過程
- IV. 「[個人的]生活過程」
 - 「総過程」を<織り込み>つつ営まれる人格的(persönlich)生活過程
 - 「身体的生活過程」(「生きられる」身体過程)を含む

「人間たちは生活する：生活論の展開」 (季報『唯物論研究』第126号、2014.02)



	生活活動の全体図
要素的諸活動	歩く、見る、話すなど
命の再生産	個体の再生産、世代の再生産
労働	職業労働、家事労働、公共労働
相互行為	抱擁、言語、分業、政治、自治など
学習	日常学習、学校学習、生涯学習
遊び	ごっこ、ゲーム、歓談、スポーツ、旅行
精神的生活活動	認識、価値判定、意志、学習など
戦略的活動	進路決定、配偶者選択、転職など
危機を生きる	トラブル対処、死に向かい合うなど

「哲学の現実諸形態」という分類視点

- (1) 地域・時代分類(古代ギリシャ哲学、17世紀西欧哲学、など)、体系上の分類(实在論哲学、観念論哲学、など)、中心課題・中心対象での分類(認識論、存在論など)だけでなく、現実形態で分類することの不可欠性
- (2) 例えばピタゴラス(BC582-496)、ソクラテス(BC469-399)、プラトン(BC427-347)、エピクロス(BC341-270)の比較
- (3) 出版・翻訳文化としての哲学、サロンとしての哲学、哲学市民アカデミー、大学(院)専門哲学、教養哲学、エンターテインメント哲学、党哲学、国家哲学でもある党哲学、教学哲学、在野の哲学運動、

「世界」:「大きな世界」と「生活世界」

- (1)「世界 (cosmos, world, Welt)」という問題。例えば、カントでは「心」「世界」「神」が哲学的理性の対象として論じられるが、このうち「世界」こそ主要対象であり、「心」や「神」の問題も「世界」に組み込まれているとも読める(『純粹理性批判』1781,1787の「弁証論」)
- (2)私の理解では「現代世界」は「相互織り込み」関係に立つ三層をなしている
- (直接層)生活世界 人格史80年→「生きる」思想
- (歴史層)近現代世界システム 近現代史約500年
- (基底層)自然世界 宇宙史138億年 地球史45億年
生命史40億年、人新世？

「世界」や「現代」を扱う「大きな」思想の不可欠性 21世紀の山積する人類史的課題

- (1) 資本主義を「超える」
 - (2) 人類の脱戦争という課題
 - (3) 地球環境危機、特に温暖化危機
 - (4) 民主主義の危機、権威主義体制と右翼ポピュリズムの拡大
 - (5) 不均等発展と覇権国家の地位をめぐる米中衝突
 - (6) 南北問題、人口爆発、貧困問題
 - (7) 情報(情報技術)革命の光と影
 - (8) 人権とグローバル・ガバナンスの低水準
-
- ① こういう人類史的諸課題への領域横断的共同作業の組織化(マルクスの「アソシエイトした知性」の展開)、それへの参加がある。
 - ② もう一つは「生活の吟味」に関わる対話的实践がある。ここでは α) 探究され続けるべき「大きな」思想と、 β) 諸個人の現実生活の、 γ) 中間にある「生きる」思想の次元を前景化するという課題が浮上。

意識の諸機能

覚醒・注意時の高速回転作動イメージ図



「生きる」思想の特質

- (1) 諸個人は①特定の時代に、②特定の「社会的位置」を占め、③他者たちとの特定の諸関係を再生産しつつ、④転変する特定の「状況」の中で、「状況」の意味を限定しつつ、「適切」と思われる行為を選択し続け、⑤action-reaction-interactionの連鎖・交差する現実過程を生き続ける。
- (2) この選択に際して、当の個人がもつ①一定の認識パターン、②一定の価値判定基準、③一定の行為規則が(も)確認できる。これらは個別経験を超えるある種の規則性・一般性を持っており、その限りである種の「思想(thought, Gedanke)」を含んでいる。
- (3) この「思想」は、社会体制や歴史運動を支える「大きな」諸思想と、直接同じではない。「大きな」諸思想を「織り込む」場合であっても、諸個人が個別状況下で不断に行為を選択し、行為連鎖・交差の現実過程を生きる際に働いている次元の個性的「思想」であり、その意味で「生きる」思想である。

事例A:赤城俊夫・その上司・佐川宣寿

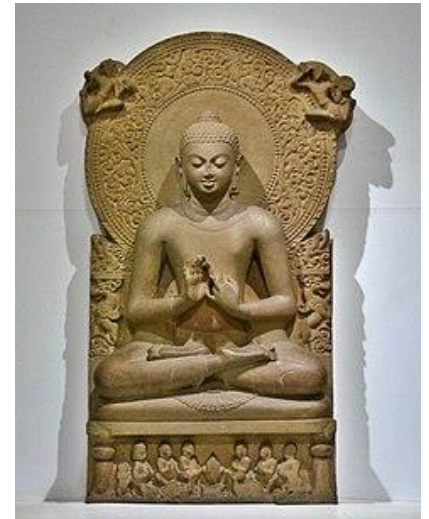
- (1) エリート官僚佐川宣寿は赤城俊夫の上司に改ざんを命じた。赤城は、上司から改ざんへの協力を頼まれ、抵抗したが情に屈し、非モラル行為に加担、苦しんで病み、自死した。妻雅子は「夫の死の意味」を考え、上司への配慮もあり、悩んだ末、闘う姿勢をとり、政府相手に裁判を起こし、闘った。
- (2) 「生きる」思想にはさまざまな分裂が孕まれている。「国民への奉仕者」と「権力者への忖度」の分裂の自覚は、上司にも、佐川にもあったろう。上司は赤城のように「人生の意味」そのものにかかわる重大事として悩むことはなかったと思われる。佐川は「ちっぽけな良心にこだわってはいは権力社会は生きられない」という別の「生きる」思想で自分の行為を支えたのかもしれない。
- (3) 各人の「生きる」思想はそれ自身非常に複雑で変化するものでもあろうし、通常は「事なかれ」で調整されていく。だが、危機局面での行為選択をとおして、このように分岐が前景化してくる。

釈迦（BC560-480）「生きること」は「苦」である

「生きることは苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。嘆き、悲しみ、憂い、悩みは苦である。恨み憎むものに会うのは苦である。愛するものとの別離は苦である。求めて得ざるは苦である。総じていえば人間の存在を構成するものは総て苦である」 「相応部經典」

生活過程には、循環的時間、段階的時間、危機的時間の三つの時間モデル。危機的時間に焦点をあてるアプローチ。

個体生命再生産→飢え、病、死
世代的再生産→子育ての悩み
労働→失業、過労、職場内孤立、将来不安
相互行為→社会的孤立、いじめ、DV
学習→「おちこぼれ」
精神的生活→バランス崩壊

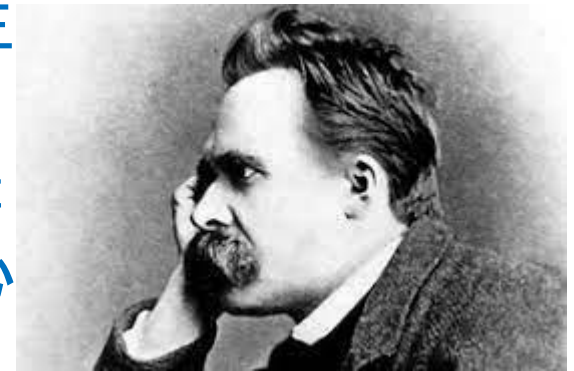


ニーチェ(1844-1900)「生きることは支配すること」

「生そのものは本質上、他者や弱者を自分のものとし、傷つけ、圧伏すること、抑圧と非情であり、自分の諸形式を[他者に]押し付け、併呑すること、もつとも穏やかに見ても搾り取ることである。...生き生きした身体は周囲を鷲掴みし、自分へと引き寄せ、優位を獲得しようとする。それは道徳性や非道徳性からでなく、生とはまさに「力への意志」だからそうするのだ」『善悪の彼岸』1886年、259節

(1) ニーチェでは「主人道徳」を選ぶか「奴隷道徳」を選ぶかの選択が「生きる」思想の根本選択である。

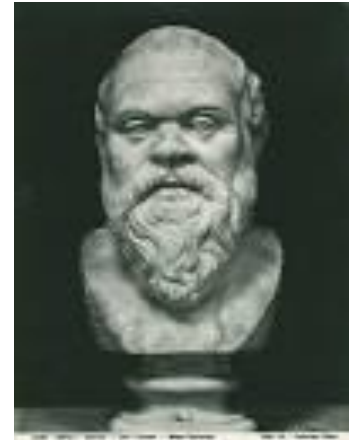
(2) 我々にとっても「権力」や「支配」は「生きる」思想の中心テーマであるが、釈迦もニーチェも「苦」や「権力」の複雑な全体構造に迫り、限定しようとしないうし、その関心が欠落している。



ソクラテスと「生活の吟味」としての哲学

- (1)『ソクラテスの弁明』(BC399,ソクラテス裁判から10年以内にプラトンが執筆)

「哲学しつつ生きるように、つまり自分自身と他の人々を共に吟味しつつ生きるように、神が私に命じられた」(28e)「人間にとって吟味を欠いた生活は生きるに値しない」(38e) 自分を死刑にしようとしているアテナイ市民が「気にかける」ことは、もっぱら身体、名声、金銭であり、真実、徳、魂、思慮を「気にかける」ことを忘れている(28e-30c)



- (3)ソクラテスの「イロニー」「産婆術」は対話者の同質性を前提にした「きれいごと」処理。「生活の吟味」の激しさと処刑、背景としてのクリティアスらの寡頭支配と対民主派テロル支配などを視界にいれず。

- (4)人形使いプラトンの「人形」としてのソクラテスからの脱却

【参照】田畑稔「生活の吟味としての哲学」、大阪哲学学校編『生きる場からの哲学入門』、新泉社、2019

「哲学の〈外への〉転回」: マルクスの場合

- 第1モデル: 「理性的意志の観念論」にたって啓蒙という「焼き尽くす火」となって「有限性の大地」に立ち向かう
- 第2モデル: 哲学と生活危機に直面する实在勢力との「歴史的ブロック」を志向する
- 第3モデル: 「哲学的良心(意識)を清算」し「ポジティブな学、歴史の学」と結合した変革的实践を志向する
- 第4モデル: ポジティヴィズムと対抗し、分節化した過程的全体を「概念把握」する上で、自分のヘーゲル派的出自を積極確認すると同時に、自分の研究成果の歴史哲学的「万能の合鍵」化を強く拒む。

拙著『マルクスと哲学』(2004)第1章「哲学に対するマルクスの関係」参照

「生きる」思想の形成諸条件

諸個人の生活過程のなかで、次の諸契機を「織り込む」形で「生きる」思想が形成され、機能し、変容する。

- ①特定の時代、特定の「社会的位置」、構築している諸関係、直面する状況
- ②社会で通用している共通感覚、認識パターン、価値パターン、行為パターン
- ③当該個人の不幸、事件や事故、危機との「出会い」、成功体験や失敗体験
- ④親、友人、パートナー、アソシエ、恩人などとの「出会い」
- ⑤社会運動や歴史運動、政治運動や宗教運動などとの「出会い」、それを介して「身につけた」比較的体系的な諸思想
- ⑥「アイデンティティー(自己同一性)」の確認。自分は「こういう人間として」周囲から受容されているのだという確認。

これらは「生きる」思想そのものでなく、それに「織り込まれ」ている〈さまざまな縦糸と横糸〉である。

「生きる」思想への接近方法

- (1) 「生きる」思想は分裂も抱え、流動性もあって、他者にはもとより、当事者にとっても必ずしも全体像が見えているわけではない。したがってそれを**前景化させる方法**が必要だろう。
- (2) 第1に必要なことは①当該主体が行う自覚的行為選択の確認と、②それを「条件づけているもの」(社会的位置、諸関係の総体、過去の体験など)の反省のレベルとを区別するということである。
- (3) したがって**危機状況での行為選択に注目**すること。(赤城、上司、佐川の分岐)
- (4) さらに当事者が日ごろ**自分の行為格率(maxim 格言)**として確認していることを列記してみる。好きな「ことわざ」なども「生きる」思想へのアプローチに役立つ。
- (5) 雨宮処凛『生き地獄天国』(2000)のような**当事者の「語り」**に耳を傾ける。
- (6) 「**生活の吟味**」を自己吟味や相互吟味(対話的吟味)の形で進める。

「生きる」思想と「大きな」思想の相互関係

- (1) 現体制や現制度や社会運動や歴史運動や宗教運動などが支えとするような「大きな」思想が、〈それだけで〉「生きる」思想を〈兼ねる〉ことはできない。両者は相互に媒介し合うが、どちらかに〈還元〉可能なものではない。
- (2) 「生きる」思想は、一方で「生活者」としての諸活動、諸制約や諸危機に直接向かい合いつつ、それを「生活者の論理」、「生きる」思想へと繋ぐことに努めて、人生を方向付けようと志向する。
- (3) 「大きな」思想は、広範な「生きる」思想の中に〈織り込まれる〉ことによつてのみ、体制や社会運動としての有効性を確保する。しかしこの〈織り込み〉は一回きりで自動永続のものではありえないし、〈織り込み〉方も諸個人の数だけ多様である。
- (4) 「生きる」思想は通常は体制や制度の思想に同調する。しかし権力集団自身が建前である制度規範を逸脱しても、「声をあげる」ことは生活者には難しい。逆に自己攻撃に向かうこともある。体制や制度の「大きな」思想に対抗する別の「大きな」思想(社会運動や歴史運動)に出会い、後者を選択する場合もある。
- (5) 「生きる」思想と社会運動や歴史運動を支える「大きな」思想の相互媒介は、「生きる」思想の側からの運動に対する「刷新要求」、「閉鎖集団化」批判としても、逆に運動に「人生を賭けている」側からの、日常性への回帰路線へ批判(「転向」「裏切り」)なども含まれる。

事例B:「生きる」思想の諸断片(行為格率、モットー etc.) (田畑のケース)

- (1) 人生、出会い半分、闘い半分
- (2) 愚直でよい(自分の個性への基本了解)
- (3) インディペンデントで生きる(1980年から)
- (4) 「ひと(他者)」の期待で動かない、期待で「ひと(他者)」を動かそうとしない
- (5) 他者の魅力に対する感受性を鍛える(編集者として)
- (6) 新旧左翼から市民主義リベラルまで、議論の場を自分たちの手で作る
- (7) 「陣地戦」は同意獲得をめぐるヘゲモニーと対抗ヘゲモニーの争いであるだけでなく、未来へ向かう失敗と学習、経験蓄積と自己吟味、新しいアソシエーション・生活様式・文化の対抗的試行的形成の場でもある。
- (8) 「ひと(他者)が皆、吾より愚者に見ゆる日は」:シニシズムを選ぶと、思想はそこで停止する。
- (9) 「ガラスの天井」の上側で生きる自分を自覚することは至難である(パートナーの死に際しての遅すぎた謝罪)